

が冬期に最上位種の優占度が突出する点に違いがみられる。B・C区では春～夏期に種数・生息密度とも大きく増加すると共に、上位4～5種の優占度が高くなるのが特徴である。

試みにShannonとWeaverの情報理論式による多様性の尺度 $H' = -\sum P_i \cdot \log_2 P_i$ を求めると、春～夏期でA区3.48, B区3.13, C区2.74となり、冬期ではA区3.26, B区2.01, C区1.00となる。

A区は溪流に沿った多様な林相をもつ地帯で採餌や営巣に適し、一年を通して比較的豊かな鳥相を擁している。B・C区は共に水場から離れた高海拔地であるが、この両者間では植生の自然性が高いB区の方が鳥相が豊かである。繁殖期にはカラ類を中心にB区が生息密度がA区より増えており、ここでは今回県内で初めてゴジュウカラの営巣が確認された。樹洞あるいは低木や笹に営巣する小型鳥類の営巣環境として、老齢夏緑林の価値の高いことが改めて確認できた。

以上、調査期間・方法とも未だ不十分であるが、九州のブナ帯で定期的に行なわれた調査例はほとんどないので発表した。現地で御指導下さった日本野鳥の会宮崎支部の鈴木素直支部長・猪崎隆氏、および専門的な御教示と子細にわたる校閲を賜った九州大学農学部動物学教室の白石哲教授に謝意を表します。

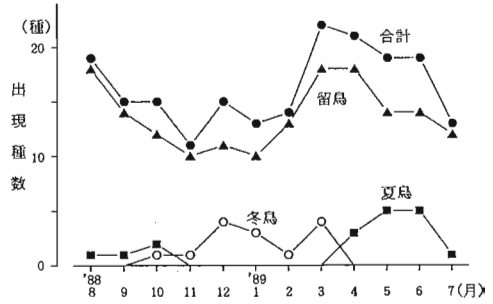


図-1 出現種数の季節変動

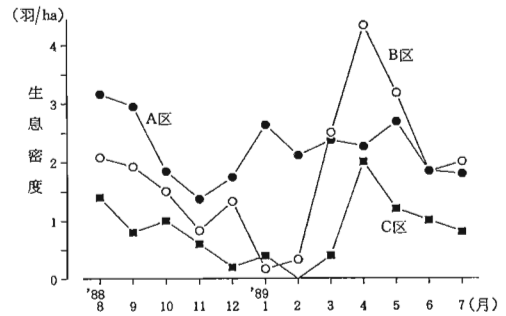


図-2 生息密度の季節変動

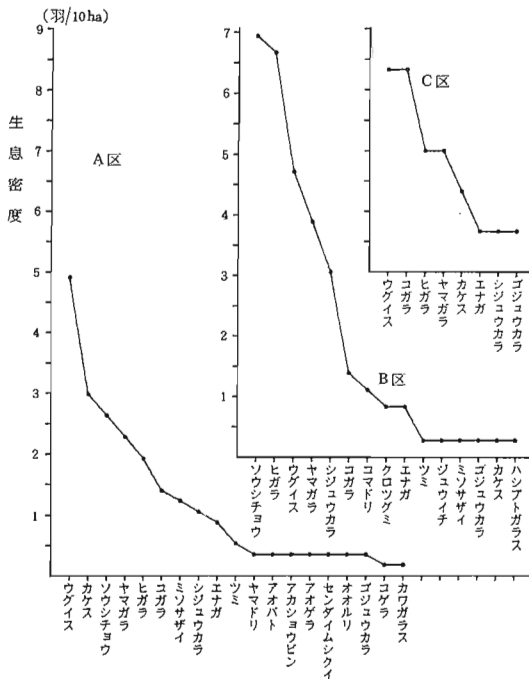


図-3 春～夏期における鳥類群集曲線

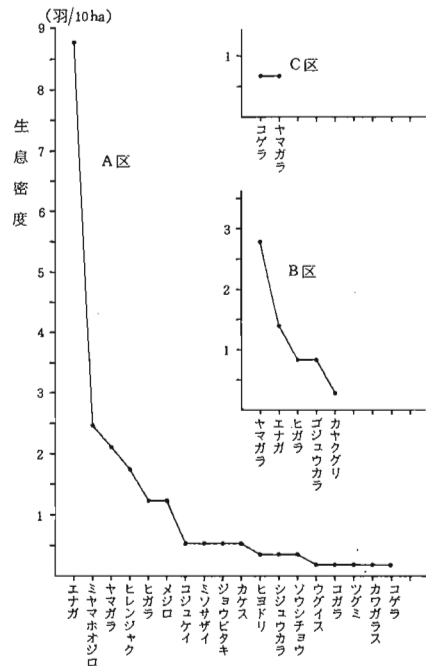


図-4 冬期における鳥類群集曲線